## 9日ぶりの救出、奇跡の生還を支えた医療

（由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.179-188）

2013年9月9日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

2011 年 3 月 11 日に発生した大地震は石巻を襲い、地震による津波や火災はさらに壊滅的な被害をもたらした。災害の現場では、災害発生から 72 時間をゴールデンアワーという。

倒壊した建物の中に閉じ込められた人が生き残る確率がこの 72 時間を過ぎるとほとんどなくなってしまう、という意味である。その時間をはるかに過ぎて 9 日目での被災者救出は、被災者の探索や救命にあたる人々に希望をあたえた。

石巻赤十字病院は地域救命救急センターに認可されており、一次、二次の医療機関では対応できない複数の診療科領域にわたる重篤な救急症例を扱っている。そこで救急医として働く小林先生曰く、震災を事前に想定し訓練していたが、怪我などの重症者が少なく、低体温症の患者が一度に 30 人も運ばれてくることは想像しなかったという。1 日平均約 60 人の救急患者を受け入れていた石巻赤十字病院にピーク時には 1250 人以上が運び込まれてきた。限られた医療資源と人員の中で、できる限り多くの人を救うのは非常に大変なことだった。災害医療の場では通常と異なり、限られた人的、物的資源を最大限に活用しなければならない為、助かる可能性がある患者さんを優先することになる。そのため本来なら助けられたかもしれない患者を救えないのは無念であったという。また、患者を診ているスタッフは不眠不休で働いている人も多く、患者だけではなく医療スタッフの体調管理も大切である。スタッフの中には、家族の安否や家の状況などが分からないまま何日も働いている人もいた。こうした状況下で働かねばならないことも、想定外であった。

同じく石巻赤十字病院救急医の石橋先生曰く、災害などというのはいつも想定外であって、想定外でない災害などない。日々の医療をきちんとやること、想定外への備えもその延長線上にしかないという。また、人間が自然の力を抑え込み、コントロールで来るなどと思い上がってはいけない。命とは絶対に救えないもので、人間は絶対に死ぬ。必ず死んでいく。死なない人間なんていない。そういう思いで患者と向き合っていないと。医療はできない。医師なら人の命を救える、自分は全能だなどと思ってはいけないともいう。

今回の震災を経験して、大きな災害が起こったとき、その時病院や医療者自身がどうありたいか、どういう医療をやりたいかではなくて、患者の医療ニーズをどうすくい上げ、どう応えるか、なのだということが認識できた。人間の力は弱く、人間は無力なものだ。だからこそ、その命を守るために、石橋、小林の両医師はこれからも救急医として働き続ける。